

秀作

2022

第55回「おかねの作文」コンクール

祖父と人を思うお金

東京都・練馬区立大泉中学校 3年 宮澤 朋希

私はどうしても祖父のお小遣いを使うことができない。正確には使う気になれない。

私が生まれたときから、祖父はお年玉とお盆玉をくれる。封筒に幼稚園までは5,000円で、小学生になってからはずっと1万円を入れてくれる。いつもお金をくれるので、祖父はお金持ちなのかなと思っていた。しかし、祖父は長年、牛乳配達の仕事をしているのでお金持ちだとは思えない。もう70歳を過ぎているのに仕事を辞めないのは働く必要があるからだ。それなのに祖父はいつも大金をくれる。私だけでなく妹にもくれる。

ある日、母は今までのお金を全て出して私に見せた。いつも祖父からお小遣いをもらおうとすぐに母に預けていたので気づかなかったが、お金は全部新品のように折り目がなかった。折り目がないお金は、銀行の窓口でもらえるそうだ。そのときはコロナが流行し始めた年だった。まだワクチンがなかったので、糖尿病を患っている祖父は銀行に行くことが難しかった。母は、次のお年玉は新しいお金が用意できないかもしれないと私に伝えるために今までのお小遣いを私に見せた。

祖父は夜起きて、12時間働き、昼頃帰宅して、すぐに寝る。平日はとても忙しく肉体的に大変だと聞いたことがある。銀行の窓口が開いているのは仕事か寝ている時間だ。一体いつ銀行に行ってくれていたのだろう。そう思うと私は胸の中が温かくなり、祖父の愛情を感じた。祖父からのお小遣いは、ただの通貨ではない、祖父の愛情そのものなのだなと思った。母にお小遣いを全部見せてもらったとき、何に使おうかとワクワクしていたが、これは絶対にとっておきたいという気持ちに変わった。

そのことを考えていたとき、祖父から聞いたこんなことを思い出した。

祖父は牛乳配達の仕事で集金に行くとき、おつり用の小銭は全て洗ってから持って行く。雨や雪の日はお客さんとお金が濡れないように、お客さんにはお札だけ

出してもらい、祖父は事前に封筒に入れて用意したおつりを渡す。一人暮らしの老人の家に行くときには、わざとおつりをゆっくり渡して、なるべくたくさん会話をしあがる。これは会社のルールではなく、祖父が考えてしていることだ。お客さんへの思いやりと感謝の気持ちを持つとこういうことを思いつくのだそうだ。祖父はお金の受け渡しの際に、気持ちをこめているのだ。

私にくれるお小遣いにもきっと何かの気持ちがかもっていると思う。祖父の思いに気づくにはまだ時間がかかりそうだが、祖父に感謝の気持ちを伝えたいと思った。手紙や電話でなく、できれば祖父のようにお金で思いを伝えたいと思った。私は、小さい頃祖父に買ってもらったおもちゃを手放そうと思っていたところだったので、それをお金にすることを思いついた。母がよく使っているフリマアプリでおもちゃを売ってもらい、そのお金で祖父の好きな昔の歌手のDVDを買うことにした。祖父はインターネットで買い物をしないし、コロナ禍で外出を控えている。祖父のために私ができる最も良い方法だと思った。今までたくさんの愛情をありがとうございますという思いをこめて祖父に送った。

数日後、祖父から電話があり、何度も喜びと感謝の言葉を伝えてくれた。ずっと欲しかったのにどこで買えるのか分からなかったと言っていた。それを聞いて私もとても幸せな気持ちになった。

昔、祖父のお金で買ってもらったおもちゃが、私を幸せにしてくれた。そして、それをお金に変えて、そのお金が祖父へのプレゼントになり、祖父が喜んでくれた。さらに、その喜びが私を幸せな気持ちにしてくれた。このようにお金を使うことで祖父と私の間で幸せを回したのだ。この経験から、私は、お金はうまく使うと人に幸せを呼び込んでくれるということに気づいた。

必要なものや自分の一時的な楽しみのためにお金を使うこともあるだろう。しかし、今は、自分や人の幸せのために使うお金の使い方を選ぶ方がいいと思っている。たくさん勉強して、いろいろなお金の使い方を知りたい。そしていつか、祖父のお小遣いを使ってみたい。

